かおるが見つけた小さな家

征矢 清作　大社玲子画

けた小さな家

大社玲子画

あかね創作児童文学 4

かおるが見つけた
小さな家

著　者　征矢（そや）　清（きよし）
発行者　岡本陸人
印　刷　新興印刷製本株式会社（本文）
錦明印刷株式会社（オフセット）
製　本　中村製本株式会社
発行所　株式会社　あかね書房
東京都千代田区西神田3-2-1　〒101
電話　03(263)0641〈代〉
振替　東京3-64150

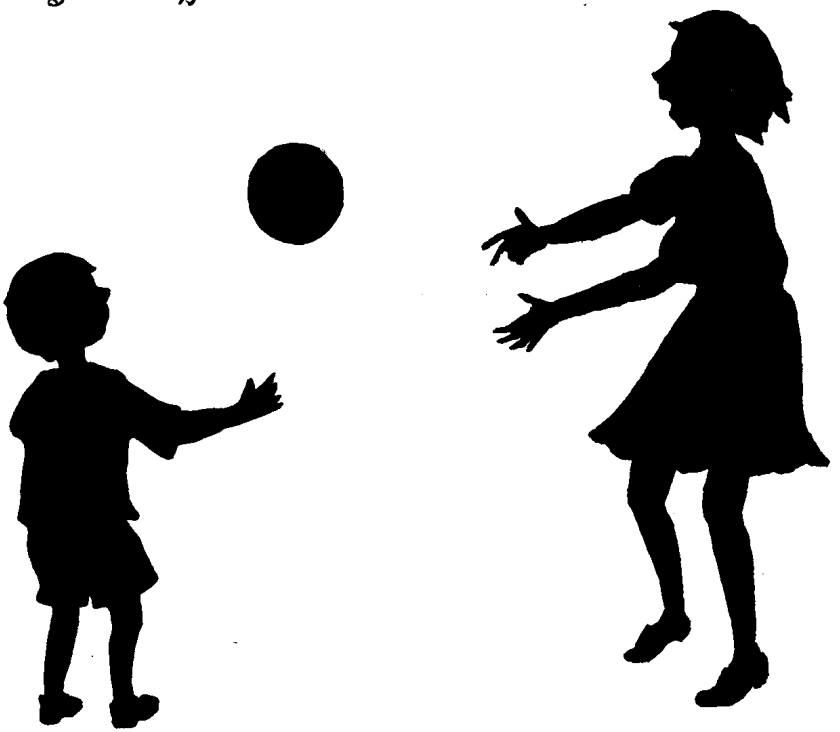
1975年11月25日発行

NDC 913　　8393-16704-0027

征矢　清
かおるが見つけた小さな家
あかね書房 1975
161p 21cm（あかね創作児童文学 4）

© 1975 Printed in Japan 著者との契約により検印なし
落丁・乱丁本はおとりかえします
定価はカバーに表示してあります

じっと目をこらすと
いままで見えなかったものが
ぼんやりあらわれ
やがてはっきりと見えてくる



もくじ

1 ピアノのあるゆうれい屋敷……6
2 なくなったねこ……20
3 おばあさんの待ちぶせ……34
4 あの家が消える？……47
5 木村さんの電話……57
6 よけいな口だし……66
7 横田さんのいいがかり……76
8 ほんとうの横田さんは？……88

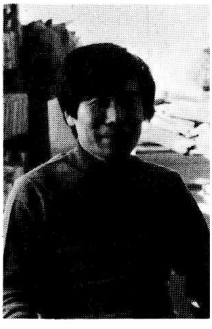
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

9 日射病……96
10 地面にひびく音……109
11 みみずばれの戦い……117
12 ひりひりする傷……129
13 死んでしまった家……135
14 紙の家……146
15 見とどける目……155

そうてい・さしえ／大社玲子

著者紹介

征矢　清（そや　きよし）

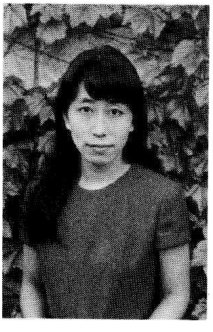


一九三五年長野県に生まれる。早稲田大学露文科卒業。一九六〇年頃から雑誌に童話を発表。著書に「やまのこのはこぞう」「いだてんの六」「うみからきた赤い気きゅう」「かさもっておむかえ」「おばけひまわり」「かおるのたからもの」「かおるのひみつ」等がある。

現住所　神奈川県横浜市緑区美しが丘ドエリングA－七〇二

画家紹介

大社玲子（おおこそ　れいこ）

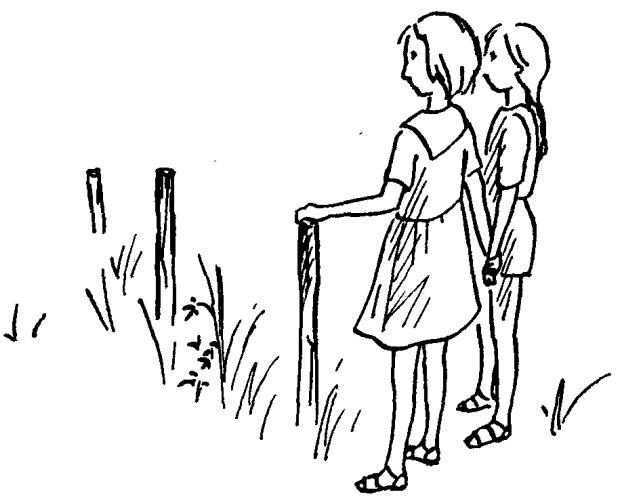


一九四六年山口県下関市に生まれる。青山学院大学英米文学科卒業。児童図書の插画の仕事に「ルーシーのぼうけん」「ルーシーの家出」「黒ネコの王子カーボネル」「みしのたくかにとをたべた王子さま」「なぞなぞのすきな女の子」「かおるのたからもの」等がある。

現住所　神奈川県横浜市金沢区富岡町二六七一～六六

かおるが見つけた小さな家

征矢　清作
大社玲子画



1　ピアノのあるゆうれい屋敷

新しい学校は、なにからなにまでぴかぴかでした。つくえもいすも、床も壁も、カーテンも新品でした。それに校庭も広々として、できたての土のにおいがしていました。

「わたしたち、まっさきに新しい教室にはいれて、とくしちゃったわね。」と、福島さんがいいました。

「そうね。でも、なんだかペンキのようなにおいがするし、よその学校にいるみたいだわ。」

かおるは、新しいいすにちょっと腰をおろしてみていいました。

「本校には一年生のときから四年間もいたんだもの、わたしはずっとあそこのほうがよかったな。」

「そうかなあ、わたしは新しいほうがいいわ。だって、この分校ができなかったら、五年生になったとたんに、あのおんぼろのプレハブの校舎にはいるところだったのよ。そ

れでもよかったの？」

福島さんがそういうと、かおるはそれもそうだなと思いました。

去年の五年生が、夏休みまえに、暑くてたまらないといって、休み時間のたびに水飲み場で顔を洗ったり頭をひやしていたのを思いだしたのです。

プレハブの校舎の屋根はうすっぺらで、かんかん照りの日は、教室がまるでむしぶろのようになってしまうのです。

「そうね、プレハブの校舎じゃなくてよかったわね。」

かおるはこういいながら、立ちあがって窓の外をながめました。

本校から一キロぐらいはなれたこの校舎のまわりには、小さな林や草むらがありました。本校の窓からは、同じようなかたちの集団住宅が見えるだけでしたが、ここはどこかぜんぜんちがう遠い場所のような気がしました。

草むらの中に、たんぽぽの明るい黄色がちらばっていて、そのむこうに青い空がひろがっていました。

「この学校のうらのほうに、小さな牧場があるんだってよ。」と、福島さんがいいました。

「牧場？　ほんとう？」

かおるは、びっくりしていいました。

このあたりにはまだ草原や小さな林が残ってはいましたが、それでも新しい家がかなり建っていて、とても牧場が近くにあるとは思えなかったのです。

「牛やぶたがいるんだって、おかあさんがいってたわ。やお屋さんのおばさんから聞いたんだって。」と、福島さんは、かおるの疑わしそうな顔を見てあわてていいました。

「ね、学校の帰りにちょっと見ていこうか。」

かおるは福島さんにうなずいてから、もう一度外を見ました。

なにか新しいかわったものが、そのむこうにひろがっているような気がして、かおるは、やっぱり福島さんのいうように新しい校舎に移ってよかったと思いました。

学校のうらの坂道をのぼりつめるとすぐに、いなかの家畜小屋でかいだことのあるにおいが風にのって流れてきました。

「福島さん、ほんとだわ。ほら！　近くに牧場があるのよ。」

かおるは立ちどまって、においの流れてくるほうをたしかめるように鼻をぴくぴくさせました。

「うん、あっちだわ。早く行ってみようよ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

福島さんは、左手の雑草にかくれた細道をかけだしました。かおるも、草に足をとられないように注意しながら福島さんのあとを追いました。

しばらく下ると、道は行きどまりになって、古い農家の庭に出てしまいました。

「あら、ひとの家の前に出ちゃったわ。」

福島さんが、かおるをふりかえっていいました。

農家の横に、細長い小屋があって、大きなぶたがいるのが見えました。小屋は、板で五つに区切られていて、そのひと部屋ずつにぶたが一頭ずつはいっていました。

かおるは、いそいであたりを見まわしましたが、牧場らしいものは見あたりませんでした。

あたりには人影はなく、静まりかえっていました。農家はすっかり戸をあけはなったままで、縁先から家の中が見通しでしたが、ねこ一ぴき見あたりませんでした。ときどきぶた小屋の中で、ぶたがびっくりするような声をたてるほかは、もの音もしませんでした。

「ね、もう帰りましょうよ。牧場なんてなさそうよ。」

かおるは、なんだかとても気味のわるいところへまよいこんでしまったような気がして、福島さんの手をひっぱりました。

「へんなとこね。でも、もうちょっとむこうへ行ってみない？　だって、ぶたがいるぐらいだから、この家のうらのほうに小さな牧場でもあるかもしれないわ。」と、福島さんも気味わるそうに、あたりを見まわしながらいいました。

大きなぶたが、それぞれの仕切りの中から、小さな目でじっとこちらを見つめているのも無気味でした。

かおるは、とにかく早くここをはなれたくて、もときたほうへ歩きはじめました。

「ねえ、待ってよ。この家のうらのほうへ行ってみれば、きっと牧場があるのよ。」

うしろから福島さんがよびましたが、かおるはなにかに追いかけられそうな気がして、草にうずもれた坂道をかけだしました。

「ねえ、待ってよ。平野さん、そんなに走らないでよ。」と、福島さんはかおるのあとを追いかけてきました。

それでも、かおるはとまらずに走りつづけました。もうすぐ、学校からのぼってきた広い道に出ると思ったからです。

ところが、細い道はまだ先につづいていました。まわりの草むらもいっそうおいしげって、道がほとんど見えないくらいにおおいかぶさっていました。

かおるは、おかしいなと思いました。立ちどまってふりかえると、福島さんも立ちど

まって大きく首をふりました。
「平野さん、おかしいわ。さっきはこんなところ通らなかったわよ。だってほら、あんなところに家があるじゃないの。」
かおるは福島さんが指さすほうをちらっと見て、道をまちがえたんだわと思いました。たしか、くるときには細道をほとんどまっすぐに下ったのに、いまいる道は、かなり右のほうへななめに通っているのです。
「わたし気がつかなかったけれど、とちゅうで道が二つにわかれてたんだわ。草がいっぱいはえていたからわからなかったのよ。」
かおるはこういいながら、いそいでもどりかけました。
ところが、福島さんはかおるのほうへ歩いてきていいました。
「ね、あの家かわってるわね。ふつうの家かしら。お話にでてくるようなしゃれた家じゃない？　古くてちょっとおんぼろで小さいけれど。」
かおるは立ちどまると、その小さな家を見つめました。
クリーム色の壁に、黒くぬった木でふちどりした小さな窓がついていました。屋根は赤いかわらでしたが、かなりうすよごれて、こけもところどころはえているように見えました。入口は、がっしりした木のドアで、窓わくと同じ黒でしたが、たてにぎざぎざ

とほりこんだもようがついていて、取っ手にはまるい鉄の金具が使ってありました。
「この家ずっとまえからあるのね。さっきの農家と関係あるのかしら。」
かおるは、福島さんのほうをふりかえっていいました。
このあたりはまだ草原ばかりで、新しくできた学校の近くの家もほとんどができたばかりでした。だから、こんなところに古めかしい家があるというのが、なんだかふしぎな感じでした。
「どんな人が住んでいるのかしら？　でも、なんだかあき家みたいね。」
かおるは、もう一度家全体を見まわしました。
窓はぴったりしまっていて、のきのところにくもの巣がかかっているのが見えました。入口のわきに、屋根よりも高くのびた杉の木が立っていて、小鳥が二羽飛びたっていきました。家の前には、庭らしい場所がわずかばかりひろがっていましたが、二、三本ひょろひょろしたやぐるまぎくが小さな花をつけているだけで、あとは雑草におおわれていました。雑草の中に、ぱらぱらと菜の花がちらばってさいていましたが、それがよけいにこの家をどこか人里から遠くはなれた一軒家のように感じさせました。
「ちょっとのぞいてみようか。」と福島さんが、もう家にむかって歩きだしそうにしながらいいました。

かおるも、いまちょうどそのことを考えていたので、だまってうなずきました。ぶただけがじぶんのほうを見つめていた農家の庭先にくらべたら、この家はずっと魅力的でした。

ふたりは道をそれると、用心しながら窓のほうへ近づいていきました。

あたりはしーんと静まりかえって、風が杉の木の細い葉をかるくこすりながらふきぬけていく音がしました。

ふたりとも口をききませんでした。呼吸をとめるほど注意深く窓のところまでしのびよりました。

福島さんが、そっと窓に顔をよせて中をのぞきました。「暗くてよく見えないわ。やっぱりだれもいないのよ。あき家なんだわ。」

かおるも、福島さんとならんで中をのぞきました。はじめ、福島さんのいうように何も見えませんでした。かおるは、両方の目のわきに手をそえて、外の明りをさえぎるようにしました。すると家の中のようすが見えました。

「ピアノよ！　ピアノがあるわ。あき家じゃないのよ。ほら、部屋のすみにちゃんと見えるわ。」

かおるは大きな声をだして、まだ中をのぞいていました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com